

スローインの研究

Study of throw-in in soccer

1K03A193-6

氏名平田 篤

指導教員 主査 葛西 順一 先生 副査 堀野 博幸 先生

1、目的

現代のサッカーでは、セットプレーからのゴールをひとつの得点パターンとして持っているチームは、かなり優位に立てる。コーナーキックやフリーキックのようにキックに関する技術的資料は多くの情報が蓄積されており、戦術的研究も多くされている。また、練習の中に取り入れられることも多い。しかし、スローインに関しては資料や戦術的研究もそれほどなされていおらず、普段の練習の中で多くの時間を費やすことはほとんどない。

本論文ではセットプレーの中でも、出現頻度が高いと考えられ、チームの中で戦術として連動した動きが必要となるスローインに焦点をあて、分析を行う。

本研究の目的は、スローインに関する基礎的データの収集、本質的特徴、現在の傾向を明らかにすることである。

2、対象・方法

研究対象は、2006年FIFAワールドカップ・ドイツ大会で行われた、ベスト8以降の8試合である。これらの試合のビデオを分析し、スタツ用紙に記録をつけた。また、スローインに関しては、ハーフウェーラインを基準にして、自陣（自ゴールに近い）と敵陣（敵ゴールに近い）にわけカウントする。そして、自陣でのスローインと敵陣でのスローインを比較して分析した。分析項目は以下に記す。

・セットプレーの出現度数

セットプレーをゴールキック・コーナーキック・フリーキック・スローインごとに出現度数を分類し、出現率を求めた。オフサイドによるフリーキックは本数としてカウントしなかった。

・スローインからクロスまたはシュートに至った本数

スローインから、相手にボールを奪われずに、クロスまたはシュートに至ることができた本数を求め、割合を求めた。

・スローインの本数と成功率

スローインの本数の合計を求め、それらを、成功と不成功(以下ボールロストとする)に分類し、スローインの成功率を求めた。受け手の選手がボールを受けたあと、次のパスが味方につながった場合、成功と定義した。また、オフサイドによるフリーキックは本数としてカウントしなかった。

・スローインに対する受け手の動き出し

受け手の動き出しパターンを、ポストプレー・フリー・チェックの動き・スペースへの動き出し・カバーの動き・コンビネーションプレー・狙いなし、に分類した。

・スローインからのプレーパターン分布

スローイン後の受け手によるプレーパターンを、ワンタッチリターン・コントロールしてリターン・第3者へのワンタッチパス・第3者へコントロールしてパス・クリアー・ボールキープ・ドリブル・フリック・ボールタッチ前にボールロスト、に分類した。

3、結果

スローインはセットプレーの中でもっとも出現頻度が高かった。スローインに対する受け手の動き出しは、敵陣スローイン、自陣スローインともに「カバーの動き」が多かった。スローインからのプレーは、敵陣スローイン、自陣スローインともに「コントロールして第三者にパス」が多かった。スローインに対する受け手の動き出しにおけるボールロスト率は敵陣スローイン自陣スローインともに「カバーの動き」が低かった。スローインからのプレーにおけるボールロスト率は、敵陣スローイン、自陣スローインともに「コントロールして第三者にパス」が低かった。

4、考察とまとめ

現在のスローインでは、ボールを失わずにしっかりつなぐことを最優先していることがわかった。また、失点リスクも考慮し、スローインをしているものと考えられる。

ボールを失わないようにするためには、「カバーの動き」でボールを受け、「第三者にコントロールしてパス」するのがよいと考えられた。